270-1967・12

昭和　年　月　日第3種郵便物認可
第270号　昭和42年12月10日発行（毎月10日発行）

昭和42年（1967年）
12月号（No. 270）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）

目　次

海外登山と良識　吉沢一郎… 1
Hindu Kusn(1967)……(Ⅲ)
Koh-i-Bandâkâ ……中央大学隊… 2
アフリカ縦断登山旅行
……早稲田大学隊… 3
Peru Andes(1967)…東京農工大隊… 4
二人の来訪者（ソ連とノルウェー）…… 5
常さん小伝（Ⅰ）……初見一雄…10
Iris Trübswetter ……雁部貞夫… 6
山小屋に生きる……永原輝雄… 6
Marcel Kurz のこと (1)…ＩＹ生… 7
秋を行く（俳句）…水田健之輔… 6
第10回紅葉会……山本朋三郎… 9
ヤルフーン河の上流……ＩＹ生…10
会務関係
山岳地図の購入 (8)　ルーム基金 (11)
ＪＡＣ図書利用規定 (8)
図書室便り (11)　会務報告 (12)
会員異動 (14)　新入会員 (15)
お知らせ
秋の叙勲 (6)「山岳」62年内容 (2)

海外登山と良識

吉沢一郎

日本山岳会の人に、こんなことをいうのは多少筋違いかも知れないが、暫らくお許し願いたい。

近頃は大分、先さまの受け入れ体制にもよることだろうが、夜行日帰り的なお粗末な海外登山隊が多くみられるようになった。と言ってもまさか、大切なザイルを肩に、薄汚れた手拭いを腰にぶらさげ、あるいは首に捲きつけ、その上、摺り減った下駄ばきのままで船や飛行機に乗り込む者はいないようだが、俺は登山家であるというような特権意識みないなものを鼻の先にぶら下げて――そんな特権は勿論ないのだが――人里遠く離れた山の奥ならいざ知らず、紳士、淑女の往来する花の都のド真中を、自分では闊歩しているつもりで横行している人もあるという。

織内信彦氏の欧州土産（会報、42、2、二六〇号巻頭参照）にも述べられてあったが、われわれの常識を外れた行為が、ヨーロッパの市街や山の町中で行なわれていたらしい。欧州ばかりではないが、日本の大使館なら日本人の世話をするのは当り前だと、口にまで出して当り散らす勇ましいのもいたそうだ。

他のスポーツのことは知らないが、登山というものは私は、礼節を弁まえた紳士のやるスポーツだと思っている。紳士にもいろいろあろう。だが私のいうのは心の貧士ではなく、nature's gentlemen（大きな辞書を引いてみること）のような人のことである。

誰でも、山をひと度趣味の対象とした以上には、登山人としての、最少限度の教養だけは身につけておいて欲しいと思う。教養という言葉が煙ったいのならば、良識と言い換えても差支えない。大学を出ても教養のない人はいくらでもいる。反対に、小学校だけしか出なくても、良識の豊かな人は多いのである。

要は、悪いことは悪い、良いことは良いという、自分達のやることに、ケジメをつけられるだけの心構えを養なって欲しいと思うのである。こういうことは学校の程度には関係がない。いわゆる一流校を出た中にも、人殺しや詐欺師はいるのである。

外国へ行く場合にはまず、ナイフとフォークの使い方を覚えよとか、シルク・ハットに燕尾服を持って行けなどと、余計なお切匙は焼きたくない。私は唯、決めてあることがあったら、素直にそれを守りなさい、といいたいだけの話なのである。決めてあることが守れないようでは、外国はおろか、日本の山へさえ登る資格はないと思う。ここでは、酒は呑むなと言われたら、その間だけでも我慢出来るのが、本当の山男だと思う。それが出来ないようならその人は、単なる山屋といわれても仕方がない。

それにしても遵法精神というのは、教養よりも良識の方に密接な繋がりがありそうだ。教養は一応高いと見られるような人でも、簡単なオキテの守れない人がいくらでもいる。そして向うの人の折角の好意を無にしたり、結果において取り返しのつかない迷惑を平気でかけたりする。台湾へ行った人、アルプス、ヒマラヤ、ヒンズー・クシュ、あるいは又、アフリカ、アンデス、アラスカ、ロッキーズ、ここらへ行ったことのある人達で、これを読み、あるいはこういうことを聞かされて、ギクリとした人がいなかったなら、筆者の幸いもこの上なしだ。

又、掟てを守るとは反対に、やるべきことをやらない遠征隊もあ

お知らせ

忘年会

▽とき　十二月二〇日(水)18・30分
▽ところ　本会集会室
▽会費　三〇〇〇円
▽バザー　スキー用服飾品（内外編物製品）
▽プレゼント　交換を行いますから、一〇〇円相当の品物を各自ご用意下さい。

従来、東京支部により毎年行なわれていた恒例の忘年会を本年も行ないます。皆様お誘い合せの上、多数お集り下さい。希望者は十二月十六日までに事務局へ必ずお申込み下さい。

スキー懇親会

▽とき　一月十四日（日）～十六日（火）
▽ところ　長野県上高井郡　山田温泉スキー場　山田温泉　山田館
▽宿泊　会員五、八〇〇円　非会員六、三〇〇円（東京よりの往復バス代、宿泊費等）
▽会費　七十八名

これも従来、毎年東京支部により行なわれていたものです。希望者にはABCDの各級にわたり講習を行ないます。

詳細は事務局へ。満員になり次第締切ります。

◇　◇　◇

十二月は、年次晩餐会開催月につき月例の小集会は行ないません。

新年からは、また毎月第四水曜日に開催する予定です。ご期待下さい。

（集会・関口）

る。例えば、日山協から推薦状をJACから紹介状をもらって行った登山隊の中で、帰国してからしかるべき挨拶をしに来たものが何隊あったろうか。聞きっ放しの貰いっ放し、これも日本の登山隊の美徳の一つとなっている。

それから又、貧乏旅行を自慢にし、それだけならまだよいが、資金の豊かな登山隊にケチをつけたがる人もある。それもその人の趣味なら、別につべこべいう理由もないが、私自身は貧乏旅行は好まない。いや少なくとも外国に出る時には、お金は出来るだけ沢山持っていきたい。といっても勿論、五〇〇ドルではどうにもならないことは知っている。だが貧すれば鈍するということもあるし、反対に、もののわかった俗人なら、金はあるほど態度も鷹揚になろうというもの。

時と場合によりけりだが、金欠旅行にもいいところはある。だが、それを理由に、誰からも顰蹙を買われ、お粗末だと思われるような振舞いには出てもらいたくないのである。金は少なくても、立派な行動はとれるはずだ。

要は良識であり、心懸けである。海外へ出掛ける諸君よ、諸君は飽くまでも日本を代表するシビル・アンバサダーである。諸君の中にそうした自覚が生れない限り、日本はいつまでも外国において、芸者ガール（五段左下へ続く）

HINDU KUSH の成果 —III—

中央大学 ～一九六七年隊

板倉勝正隊長からこのほどその登山隊についての結果の連絡をうけた。（注・隊員は二六四号に発表してある）

それによると、コー・イ・バンダカー（Koh-i-Bandâkâ, 6843m）の第四登（独、伊、東北学院大）と、プンタ・トリーノ（Punta Torino）の第三登（独・伊）をやったことになる。前者に登った隊員は、隊長の叔父（故板倉勝宣氏）が、模さんからもらったシェンクのピッケルを携行したという。

但し編者の知る限りにおいてはバンダカーの登頂は次の様になっている。

初登
一九六〇・九・二二（独）
隊長 Wolfgang Hansemann
二登
一九六三・七・一七（独）
隊長 Thomas Trübswetter
三登
一九六五・七・八（独）
隊長 Johann Seiner
四登
一九六五・七・二五（伊）
隊長 Ricardo Varvelli
五登
一九六六・七・二八（日）
隊長 板橋元一（東北学院大）
六登
一九六六・七・七（日）
隊長 板倉勝正（中央大学）
登頂者 市川邦治、広田靖典
七登（南面よりの初登）
一九六七・七・一〇（英）
隊長 D.K. Scott.

次のプンタ・トリーノについては、新聞（中日九・一）によると六、二〇〇mとあるが、その地図を見ると、サキー谷（Sakhi）の一番北にあるものらしいので、他の地図を参照してみたらそれに該当するものがない。高度を信用（旧高度 6,200m）するとすれば、コー・エ・バンダカー・サキ（Koh-e-Bandâkâ-Sakhi, 6,414m, 新高度）となり、位置からすれば、コー・エ・カー・サフェッド（Koh-e-kâ-Safed, 5,950m, 6,192m, 後者は新高度）となる。多分後者であろう。それならば、

初登
一九六三・七・四～（独）
隊長 Thomas Trübswetter
二登
一九六五・?・（伊）
隊長 Ricardo Varvelli
三登
一九六七・七・一五（日）
隊長 板倉勝正（中央大学）

のようになる。但しイタリー隊はこれを Citta di Torino(6110m)と呼んでいるようである。

因みに板倉隊の本峰への登頂者は、片山博、市川邦治、広田靖典、磯部幸則の四名、帰途キャラバンの途中、入山進行中のイタリア隊にあっている。（注・このイタリア隊は、W・フレイからの通信によると、Darrah-i-Shahran に入って Diuk Deh Ambi (5619), Koh-i-Sisgeik (c. 6000) を含めて一二峰に登っている。）

CIよりバンダカー峰を望む

☆「山岳」第62年内容☆

アーサー・ジェフリーズの富士山　成瀬岩雄
会員第一号の人、城数馬氏のこと　藤島敏男
山と明治天皇　広瀬誠
海外関係
アラスカ
ハンター及びフォレーカーの登頂　錦織英夫
ボナ峰登頂　東京教育大山岳部
アンデス
アンデスからアマゾンへ　同志社大学山岳会
アコンカグワ南壁　原真
ティエラ・デル・フェゴの山旅　安間荘
ボリビアの山（一九六五）　岡島成行
ヒンズー・クシュ
コー・イ・バルダコル登頂　板橋元一
ミール・サミール（一九六六）　中馬敏隆
バタクシャン山地の旅　安川茂雄
其の他
東グリーンランドの山　池田錦重
アンナプルナ北方山域の踏査　葉師義美
グランド・ジョラス北壁　伊藤敏夫
新潟県境全縦走調査登山報告　藤島玄

追悼

斎藤長寿郎　磯野計蔵
和田豊種　石黒清蔵
高木菊三郎

図書紹介・会務報告・海外登山年表・英文梗概・地図多数・写真約五〇葉、約三〇〇頁、予価一八〇〇円也

『山岳』62年は右のように決定し、漸やく印刷に回わしたところです。今回は一部原稿の到着が非常に遅れたものがあり、内容の決定に手間どったからですが、従って今後相当馬力をかけても、年末年始がはさまるため、従来より多少刊行がおくれる模様で、その点予め御諒承願いたいと思います。

（一九六七年11月20日　望月）

（一段目より続く）と人力車と、腹切りの国としてしか残らないであろう。

山の記録さえつくれば、あとは野となれ山となれでは、諸君はそれでいいとしても、そして日本のお粗末なジャーナリズムはそれで満足するとしても、それでは後に続く、真面目な登山人までが、世界のいたるところで、鼻つまみになり、Come here when we, ve two Sundays in a week! などと言われるようになる事は間違いない。

『アフリカ縦断旅行一万七千キロ』

早稲田大学アフリカ縦断登山隊

◇　◇　◇

▽キリマンジャロとルウェンゾリ

一九六七年三月、早大アフリカ隊はスーダンのカルツームから東アフリカ（ケニヤ・ウガンダ・タンザニア）へ飛んだ。

なんとか陸路から東アフリカへ入りたいと、スーダンで二十日間ねばったけれども、南部地方の治安が悪いという理由で拒絶されてしまった。

ウガンダのエンテベ到着後、二ケ月余り遅れた日程をとりもどすため、二隊に分れ、キリマンジャロとルウェンゾリへと向った。

三月十九日。アフリカ最高峯キリマンジャロ（五八九五米）に登頂。ルウエンゾリ隊は三月二十日、最高峯のマルゲリータ（五一一九米）に東稜から登頂。マルゲリータは日本隊としては第三登。東稜からは初登である。

ホテル・マンダラ・ハット（旧名ビスマルク・ヒュッテ）のディレクターの話によれば、キリマンジャロの最高峯に達することのできるのは、全登山者の2％。「ケニヤからキリマンジャロ」R・トリュフォ著、近藤等訳では、第二峯のギルマンス・ポイントまで行けるのは10％とある。

一方、ルウエンゾリ隊は、三月十四日、最奥の部落イバンダを出発した。そして三月二十日二時四十分マルゲリータのピークに登った。ガスが濃く何も見えないので、ツエルトをかぶり紅茶を暖めて一時間待った。

突然ガスが消え、ルウエンゾリの山峰はもちろん、ウガンダ側、コンゴ側の大森林、蛇のようにうねって流れるセムリキ川、銀色に光るジョージ湖、足下に緑の氷河湖が見渡せた。

早速、アルバートのピーク（五〇八七米）を往復した。簡単な雪稜を10分の距離である。アレクサンドラも近いが、その間の稜線は深く落ちこみ、複雑な雪庇が発達していた。四時二〇分下山。岩の部分はアブザイレン七回をくり返して七時三〇分小屋に着いた。

▽アトラス登山

稲山会、山の会のメンバーが主力となり稲山会役員会もバックアップした早大アフリカ縦断登山隊は昨年十月下旬、北アフリカのアルジェリアを遠征の出発点とした。

まず、西のモロッコへ足をのばし、ハイ・アトラス山塊に日本人としては初めて接近した。十一月上旬のハイ・アトラスは晩秋から冬山に変ぼうしていた。

アトラス登山の基地イムリルまでは、マラケシュから車で半日、途中小さな峠をこえた。イムリル村から十三頭のミュールに八〇〇キロの荷物をつんで、三人のガイドが指揮をとる。

ネルトナー小屋は、ヨーロッパ風の建物で一九三八年にフランス山岳会が三二〇七米のところに建てたものである。アトラス山域には三つのヒュッテがあるが、我々はツブカル山に最も近いここを選んだ。

十一月一日よりソブカル周辺を登山

11月1日。霧の中をアガルジン（三七一〇米）に和田、梅崎、岡崎、ガイドのラッセルが登頂。タダット（三八三七米）には、三木、岡部、久富、ガイドのタンゼンが登頂。

11月2日。ラス・ヌ・オウエンクリム（四〇八三米）に藤沢、三木、岡崎、ガイドのブラヒムが登頂。アフェラ・ヌ・オウエンクリム（四〇四三米）には井上、岡部、久富、タンゼンが登頂。

11月4日。ツブカル主峯へ三パーティに別れて向った。イクビ沢ルートを和田、梅崎、ラッセル・イムゼル沢ルートに藤沢、井上、ブラヒム、西南西稜ルートは三木、岡部、久富、タンゼンの編成である。

イクビ沢隊は八時四七分。イムゼル沢隊は午後六時四〇分。西南西稜隊は午後三時四〇分にそれぞれのルートから頂上に達した。

▽サハラ砂漠縦断とタハト山の登山

地球上最大のサハラ砂漠とは一体どんな所なのか。日本では全く知られていない。月本人でサハラ縦断をした人はいないだろう。自動車で走破出来るのだろうか。

サハラ砂漠を北から南へ縦断するルートは三本ある。中央幹線と呼ばれるアルジェよりインサラ、タマンラセットを通り、ニジェールのアガデスに出て、ナイジェリアのカノに達するルートを選んだ。

車は六トントラックとジープ（ランドクルーザー）の二台。砂漠の中でガソリンのもっとも補給できない区間はタマンラセット、アガデスの九八〇キロ。アルジェ＝アガデスは三〇四〇キロである。

12月9日。アルジェ出発。エルゴレアまでの九五〇キロは舗装道路で問題はなかった。アルジェから一四〇〇キロ走って五日目に砂漠の部落イン・サラ着。イン・サラからタマンラセットまでは七〇〇キロ。タマンラセットはサハラの真只中にあり、緑が多くツアレグ族のオアシスである。ここからサハラの山、アハガル山群のタハト山に登るのが当初からの計画の一つであった。

タマンラセットからアハガル山群へは一九五二年に作ったがたがたの自動車道路がある。丘陵地帯をのぼり麓を迂廻すると二七六〇米のアセクレム山の鞍部に着く。アセクレムの頂き附近にフーコー神父の意志を継いだ僧たちの岩小屋がみえる。峠からデコボコ道をさらに進み幕営した。翌朝は四時半出発。アハガル山地の最高峯タハト山（三〇〇四米）は一九二三年オギュースト・ロンバー、ローベル・ベルのスイスとフランスの地理学者によって初登頂されたが、意外に大きな山でジャンダルムを前方に、後方、蒼空の中の岩峰は北岳の峻厳さを感じさせる。

和田、藤沢、岡部、岡崎の四名がタハトの頂上に達したのは八時十五分だった。

タマンラセットからニジェール国境のインゲサムまで四一〇キロは、まさに試練の道であった。12月26日。アルジェ出発以来十八日目の昼前にインゲサムに到着。アガデスにたどりついたのは12月28日であった。

▽カノよりカルツームへ

（消息不明ニュースの前後）

1月7日。カノを出発。東へ向う。道はよく9日の昼にカメルーンに着く。カメルーンとチャドの国境はチャド湖に流れ込むシャリ河を境界にしている。フェリーで河を渡るとチャドの首都フォール・ラミーだった。

外務省には、アフリカ大陸担当として中近東課とアフリカ課の二課がある。アラブ系のモロッコ、アルジェリア、アラブ連合、スーダンなどは中近東課の管轄なのだが、チャドはどちらの課にも入っておらず、強いていえばヨーロッパの在フランス日本大使館の管轄に入るそうで、アフリカの中でも日本には遠い国である。

フォール・ラミーに着いて初めてスーダンへの国境が開かれていないことがわかった。この国境閉鎖はスーダン内の住民がチャド北部の回教徒と結んでチャド政府に楯つく動きがあるとチャド側が一方的に閉鎖。その後、両国政府間で和解が成立したが、実際の国境通過はチャドが禁をとかぬままの状態だった。

しかし、ここまで来る途中のアルジェリア及びナイジェリアのスーダン大使館、またナイジェリアのチャド大使館では開かれていると言明していたのである。その場まで来てみないと事実が事実として存在しないのもアフリカの若さのゆえか。

国境が閉されているにもかかわらず、一週間に一便、空路の往来が運航されているのも不思議である。とにかくスーダンに入国するために、中央アフリカ共和国経由に活路を求めた。が、それも中央アフリカ共和国大使館の話にもかかわらず、近くまで来て道路が途中で消滅していることが判明。めぐりめぐって振り出しのフォール・ラミーに戻ってしまった。

その間、日本への連絡が取れなかったことから、消息不明のニュースが流れたのであろう。

ラゴスに引き返えすか、カルツームへ空路をとるか、ギリギリのところでチャド大統領の許可が下り、フォール・ラミーを2月6日に再出発することができた。閉鎖以来、初めての通過というラッキーさであった。

途中、泥棒にあったり、車が砂に沈没したりの苦難はあったが、2月20日、カルツームの日本大使館に着いた。（完）

PERU ANDES

—1967—

Jirishanca (6126)

(Cordillera Huayhuash)

Veronica (5750)

(Cordillera Urubamba)

◇東京農工大学◇ ◇の成果報告◇

—付・外国隊—

ペルーに来て以来、知らぬまに五ヵ月たってしまいました。六月～八月のコルディエラ・ワイワッシュ及び八月～九月のコルディエラ・ウルバンバの登山計画を終り、昨日無事リマに帰りました。春、冬の間悪い天気のリマもようやく晴天のリマに変わるようです。

〔ワイワッシュでの行動の概略〕

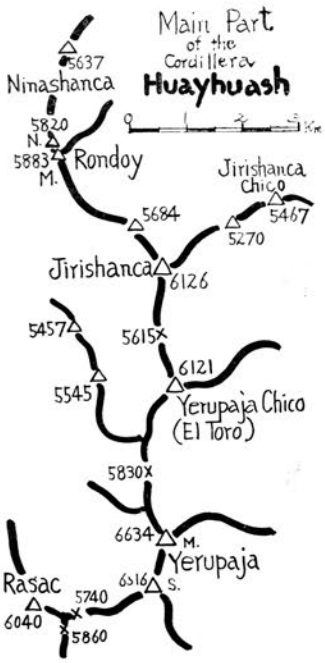
六月二五日にB・Cをヒリシャンカの下のミツ湖（4000m）に作り、六月中はブラブラと高度順化のために使い、七月からヒリシャンカを登る準備にかかりました。

ネバド・ヒリシャンカ主峰（6126m）

七月二日にヒリシャンカ氷河の上部、四七〇〇m附近にCIを設け、それから約一週間、ヒリシャンカの山稜に出る雪壁と氷滝、岩壁に約六〇〇mのフィックスをし、アタックに入りました。

アタックは七月一二日から五泊六日のビバークの登攀でしたが、三人で登ったため、スピードに欠け、五七〇〇m附までしか登れず、一八日にCIに帰りました。その後BCで四日間程休養、七月二四日から二人でアタック、第一日目五五〇〇m、第二日目五九〇〇m、第三日目六〇〇〇m、七月二七日に、ヒ峰の頂上（六一二六m）に立ちました。下降はまた五七〇〇mでビバーク、結局登り三ビバーク、降り一ビバークの登降でした。

五〇〇〇mの取付から頂上までは殆んど急な雪壁、氷のハング、岩の連続で、上下とも全ピッチスタカットで行動せねばならず、苦しい登攀でした。前に登ったオーストリア隊のルートとは、取付は全然違いますが、リッジに抜けたあと五三〇〇m附近からは大体同じようです。又あまり天気が良くなかったので、五七〇〇m、六〇〇〇mのビバークは風に吹かれ、何か非常に寒く、殆んど眠れませんでした。でも何とか無事に済み幸いでした。



他の山もBC又はCIから殆んど全部ラッシュで登りましたが、大体一～二日のビバークが必要でした。

八月に入るとワイワッシュは殆んど連日雪になってしまいましたので、八月一〇日頃下山、ウルバンバ山群に入りました。

ウルバンバでの行動の概略

八月末、九月ではあまりよい天気も望めないと思い、アプローチの近いVeronica 山群に入ることにし、ベロニカのふもと Chilca(2700m) に、八月二五日BCを作りました。ベロニカ山群といっても主な山は、Veronica (5750m), Marconia(5340m), Bononia(5110m) の三峯しかないので、結局これだけしか登りませんでした。ベロニカは三ビバーク、あとの二峯は二ビバークの登攀でした。

ベロニカの方はワイワッシュの山々と比較すると、何か面白味の少ない山です。傾斜の緩いためか、稜線にでるとやたらとラッセルが多く、ただ疲れるだけで……やはり登る楽しさは、北の方の山、ブランカ、ワイワッシュ等に多いようです。

九月のウルバンバの天気は予期した程は悪くなく、雨はよく降りましたが、激しいものではなく、だいたい午後半日であり、又雪線以上は雪だったので、登れない程の悪天ではありませんでした。しかしシーズン的に遅かったためか、クレバスが広く又多く、その通過には苦労しました。

× × × ×

いま、リマにて荷物及び記録の整理中です。それが済み次第、ボリビア、チリ、アルゼンチンをまわり、冬頃日本に帰る予定でいます。

別紙に今シーズンのペルー・アンデスに入った各登山隊の記録を同封いたします。まだ未整理のものもあり、不完全のものですが、一応の参考にしていただけたら幸いと思います。会の皆様によろしく。

（九月三〇日付、リマにて　松田宛）

◇　◇　◇

東京農工大学の成果（一九六七）

（隊員名他、二六一号参照）

—注・但し隊長は、田中元と訂正—

Huayhuash 山群

7・10 Paria (5172 m)

古畑、小林、和智、岩谷

7・23 Ninashanca (5637 m)

古畑、和智

7・27 Jirishanca Grande (6126m)

田中、加藤

7・27 Jirishanca Chico (5467m)

F. Oestemer, 岩谷

7・27 Jirishanca Chico Oeste

小林、H. Alvaiza

7・28 同峰

古畑、岩谷

8・1 無名峰（五〇〇〇m級）

小林、H. Alvaiza

8・2 Ninashanca

F. Oestemer, 岩谷

8・5 Carhuaraju (5002 m)

古畑、加藤

Urubamba 山群

8・30 Bononia (5110 m)

古畑、加藤

（次頁下段へ）

二人の来訪者

近頃は外国の多くの有名な登山関係者が日本山岳会の事務所を訪れてくるが、最近は又珍らしい国からのお客さんを迎えるチャンスに恵まれた。

一人は上掲の名刺をもって現われた、ソ連邦電気技術工業省次官、V・S・ボルシェツ・マスターのタイトルを持っている人で、今度は日本の電気工業界の視察団長として来日した訳であるが、矢張り山男らしく日本へ来たら日本山岳会の人々に会って行きたいと思ったのであろう。世話役の東芝の幹部にその意向を申出たらしい。

ソ連人の訪問は必らず二人連れ（この頃は大部変って来たという説もある）で、一人で来れば大ものだと聞いていたところへ彼は一人でやって来た。（10月24日夜）。大男だった。田舎地味たところは一つもない。寧ろ世なれた実業家といったタイプであった。登山家には見えない、といったら両手をあげていた。事実彼はエルブールスの登山中心地で行政面での運営担当責任者であるらしい。寄せ書の双峰はエ峰で、ボ氏の画いたものである。

彼のロシア語は袋氏や田村君に言わせると非常にわかりいいものだそうだが、われわれにはチンプンカンプン。

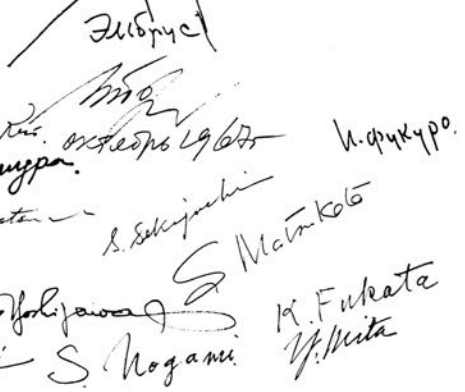
ロシア語の図書や雑誌のないのにはガッカリしたと思うが、各国から来るいろいろの言葉の年報や月報がズラリと並べられているのを見て感心していた。

それにしても新らしいルームが出来たということは有難いことである。

（当日の出席者）
松方三郎、三田幸夫、吉沢一郎、深田久弥、松田雄一、袋一平、田村（俊介）、関口周也。

（吉沢記）

В. С. БОРУШКО
Заместитель
Министра электротехнической
промышленности СССР



Anne Naess

◇ ◇ ネスと言っても、H・Kやノルウェーの山々に関心のない人には余り知られていない名前である。

ノルウェーの山々は兎に角として、H・Kの最高峰、ティリチ・ミール（七七〇八m）に最初の足を印したのは、彼の率いたノルウェー登山隊である（一九五〇年）。面も面白いのは登山年表を見てもわかる通り、これ以前にH・Kで六〇〇〇m以上の山は一つも登られていなかったことである。その上彼は一九六四年に再び（一九四九年の踏査行を加えれば三度）チトラルに現われ、T・Mの東峰（七六九一m）南壁（二五〇〇mの壁）に挑み、Anders Opdal と Ralph Höibakk の二名によってその目的を完遂せしめた（7月25日）。誠に執念の男と言わなければなるまい。

一九一二年一月二七日の生れであるから今年は五五才。油の乗切った年配である。二四才で哲学博士、二七才でオスロー大学の哲学教授は立派である。長身痩躯、がっちり型ではないが、白い鬚を二、三本づつ対につけたら、廿日鼠には見える親しさと心安さを持っている人物である。

ノルウェー山岳会は現在会員一五〇名、そのうち一〇〇名がアクティブに登山をやっているという。彼らの活動地域は主としてその国の北部にあって、ここには峡湾の海面から二〇〇〇m近く直立している花崗岩の岩壁が幾つもあるそうだ。ノルウェーの山岳界にハーケン技術を最初に導入したのは彼であって、老人連の白眼視を尻眼に、若い人達の支持を得ながら、それらの人の技術と精神を世界的なものにまで引上げていった功績は大きい。年は二〇も違うが、ノルウェーの槇さんと言っても差支えないと思う。

銀座で彼に饅を食べさせた時は面白かった。これらについては「山溪」や私の訳書に書いておいた。（吉沢記）

（42・11・14）本会ルームにて。右から深田久弥氏、アルネ・ネス氏、吉沢一郎、松田雄一氏。（あかね書房提供）

（四頁下段より）

9・4 Marconia (5340 m)
小林、和智
9・6 Veronica (5750 m)
田中、岩谷

◇ ◇ ◇

ペルーにおける外国隊（一九六七）

1) New Zealand—Cord. Caraibaya, David M. Roberts—
2) Zürich (Swiss)—Cord. Blanca, Paul Roth—
Uranraju (5165 m), Yanaraju (5225 m), Ishinca Chico (5305 m), Chopiraju (5116 m), Ishinca (5530 m), Ranrapalca (6080 m)
3) Brazil, Italy—Cord. Blanca Domingo Giobbi
9) と同じ
4) München—Cord. Llaños Central, Elke Kübel.
Tatajaico (5060 m), Manon(5290 m), Tembladero (5595 m), Paccarin (5240 m), Yana Salla Corancato (5200 m), Tatatunshu(5255m), Tranca(5370m), Unnamed(5410m), Tuyujutu(5650m), Tuyujutu 'Snow Dome" (5600 m), Rocca South Summit (5400 m), Rocca North Summit (5410 m), Unnamed (5090 m), Unnamed (5200 m), Shallanca (5400m), Pyramid Peak (5270 m), Mellizo South Peak (5280 m), Mellizo North Peak (5265 m), Tatajaico I (5070 m), 〃 II (5200 m), Taico (5520 m), Tuanita (?), Manon II (5285 m), Tunshu West (5565 m), East (5650 m), Colque Punco (5600m)
5) München—Cord. Blanca Werner Karl
6) Chile—Cord. Blanca
E. Echevarria—Pisco (6000 m)

(continued to p. 6)

☆ドイツの女流登山家・・・Iris Trübswetter・・・

雁部貞夫（六一八八）

◇　◇

西パキスタン、チトラルのオアシスと氷河を結ぶ愉快な旅をしてからもう一年たってしまった。今日はその折、チトラルで会った、ドイツの女流登山家のことを記したい。

一九六六年の夏僕と友人の小田川兵吉はチトラルの町から一〇キロ程北のドロムツという小オアシスでドイツのババリア隊の人達と一週間程、愉しい生活を共にした。

ドロムツのシャハザダ氏邸で僕等は暮していたが別にチトラル河左俣のアルカリ河を少し溯った所にシャハザダ氏の山荘があり、そこにシンゲイク（Shingeik・七二九一米）に登頂したババリア隊の連中がのんびり暮していた。七千米峰に成功して彼等はチトラルの愉しい生活を満喫していた。隊長はトーマス・トリュブスヴェッター（バンダコール・六八四三米の第二登頂者）。その細君がここに記すイリスさんである。トーマス氏の方は今年三〇才、二メートル位ありそうな大男（英語が余りうまくないので僕などは却って気楽に話せた）で、イリスさんはその半分位しか巾が無さそうなかぼそい体つきをしている。年はまだ二十四、五才くらいのものだろう。

さて、彼女はシンゲイクへ登る途中体調不調でダウンした夫君をさしおいて？　見事に初登頂に成功してしまった。これはヒンズー・クシュに於ける女性の登高新記録である。ヒンズー・クシュの未踏峯は目下次々に登頂されている最中だが、女性が七千米の峰に立つことは今後と言えども少ないのではあるまいか。

ヒマラヤ全体でもクロード・コーガンがチョー・オユーの七七三〇米迄登っているが、これが目下のところ女性の登山史上最高到達記録である。次でディレンフルト夫人がシア・カンリ西峰（七三五五米）に登頂した記録。前述のコーガン女史が一九五三年にヌン・クン山群のヌン（七一三五米）に登っているが、他にウァークマン夫人がヌン・クン山群中のピナクル・ピーク（六九四九米）に登っている。しかし、これは厳密には七千米峰ではない。女性が七千米峰の登頂に成功したのはヒマラヤ登山史上、ディレンフルト夫人、クロード・コーガン、それに去年のイリス・トリュブスヴェッターを含め、数隊にしか過ぎない。

イリスさんは一九六三年に中部ヒンズー・クシュのバンダコール・サキ（六四一四米）にも登っている。ヒンズー・クシュでは一九六一年にミール・サミール（五八〇九米）を試みたダンシース女史のような威勢のいい小母さんもいるが、七千米峰を試みたのはイリスさん以外一人もいないのである。

クロード・コーガン亡きあと、その衣鉢を継ぐ女性は恐らくこのイリスさんではなかろうか。彼女はまだ若い。しかも、夫君はヒンズー・クシュを熱心に研究している登山家である。この先おそらく、彼等夫婦はヒマラヤの谷々に幾度となく、フォルクス・ヴァーゲンに乗ってやって来るだろう。再会の日が楽しみである。

チトラル滞在中のある日、シャハザダ山荘を訪問すると、イリスさんは丁度、ビキニ・スタイルで水浴の最中であった。パキスタン旅行中、若い女性の素顔すら、まじまじと見る機会の少なかった僕にとってこの光景は少なからず生々しい迫力を持っていたことを告白しよう。僕等がチトラルで高い山に登れなかったのは或いはこの時のショックが強すぎたためではあるまいか。山好きの亭主のためにタイプの一つもうてて、山へ入ったら氷河のベースキャンプで一人で留守番が幾日も出来る、そんな甲斐性のあるベターハーフを見つけ出さぬ限り、僕は又、彼等におくれを取りそうである。

（一九六七・10・17記）

×　×　×

写真説明　チトラル帽をかぶっているのが主人、真中が夫人、端がわたしです。（チトラルにて）

◇秋を行く◇

水田健之輔

・霧流れさまよい歩く夢浮島
・吹割の滝に句碑みる初紅葉
・老神の温泉の香の匂ふ峡紅葉
・ざんざ降る雨の中なる崖蟋蟀
・青嶺みゆボートで遊ぶ薄原湖
・椎坂や林檎囓りて憩いけり

◇・山小屋に生きる・◇

一六九三　永原輝雄

山が好きで一九三七年に日本山岳会に入会した私は、終身会員の特典で、爾来三十年会費は免除され乍ら、毎年「山岳」を初め会報其他会の刊行物の配布や、催物の案内等を貰う、恩典に浴してありがたいと思っています。

これに対して私は、時々雑文を会報に投稿する位で、何等酬ゆる所のない会員で、今日まで過して来た事について、申訳ない気がして何か会に寄与する事が出来ればと思っていました。ところがたまたまこれまでの職場を老齢のため退職して、如何に余生を送ろうかと思っていた矢先に、山岳会で事務局員を募集している事を知り、山への慕情やみ難く、年齢其他の条件で不適格を知り乍ら敢て応募した処、理事各位の御好意により計らずも採用が決って、この度本会のルームに勤める事になりました。

ここは七月初めに移転したばかりの快的なルームで、仕事は理事会及び各専門委員の指示に従って、会を運営する庶務的の事務や、集会の世話等で間口は可なり広いが、精神面の苦労は少なく、現在の自分にはうってつけの職場であります。私は今度ここで働く事によって、会に対する以前からの心の負担が、多少でも軽くなった喜びを感じています。

それにここは内外の著名山岳人が集い、又世界中の登山界の動向に触れる機会にも恵まれ、一方万巻の山岳図書に囲まれた図書室や、クラブ色豊かな土曜会の雰囲気等は、素晴らしい都会の山小屋と云えましょう。

私はこの山小屋にあって、小屋番としての生甲斐を感じ、ルームに来られる会員の皆さんに、喜んで頂ける小屋番になれたらと念願して居ります。

本会事務局員就任の挨拶を兼ねて、今後の御支援をお願い致します。

秋の叙勲

政府は「文化の日」の十一月三日付で〝昭和四十二年秋の叙勲および賜杯〟（生存者）の受章者二、六四一人を発令した。

勲一等～勲三等受章者の中には次の本会会員三名がその栄誉に浴したのでお知らせする。

×　×　×

藤山愛一郎氏 70（会員番号三九五番）
勲一等旭日大綬章（多年政、財界で重責を果した功績により）

石井鶴三氏 80（会員番号七〇九番）
勲三等旭日中綬章（芸術院会員として多年芸術につくされた功績により）

矢田城太郎氏 76（会員番号二四五番）
勲三等瑞宝章（東京共済病院長として多年医学界につくされた功績により）

なお、地方在住会員の方で、叙勲の栄に浴した方のお名前を御存知の方は事務局までお知らせ下さい。

(continued from p. 5)

7) California—Cord. Blanca? Huascaran Sur(6768 m), Chopicalqui (6400 m)
8) New Zealand—?
9) USA, Italy, Brazil—Cord. Blanca, Herbert Adams Carter—
Cashan Oeste (5701 m), Huamashraju (5433 m), Yanamarey (5202 m)

（編者注・右は田中元氏がリマから送って来た情報であるが、多少補正を加えた。）

◇マルセル・クルツ◇
（I）の業績

"Die Alpen" の八月号に速報として簡単にその逝去のことが報じられていたが、その文章の最後のところにあった。Berne, le 22 Juillet 1967 というのは、多分、彼があの世へ去った日のことを示しているのではないかと思う。

九月号には当然詳報が出ると思っていたが、その通りで、二十年間交友を続けていた Wyss-Dunant が追悼記の筆を執っている。"Bergsteiger" の九月号では、Hans Richard Müller というのが、約一頁分、クルツの歩いた道を紹介していた。

私はクルツとは文献の上で可なり古い馴染みであった。彼が一九三三年の "Die Alpen" に "Die Erschliessung des Himalaya" という当時としては貴重な解説を書いているのをみて、私はそれを早速訳しておいた。戦争前のことだったのでその原稿用紙も大部古色蒼然となっている。これが直接役に立ったのは、「山と溪谷」の一月号（一九六七年）に「ブータン・ヒマラヤの夜明け」を書いた時であった。

それから彼の著わした "Chronique Himalayenne"(1959) は私に大変なことを教えてくれた。例の Charles Alfred Bell の生年の方はどうにかわかった（誰かに聞いたのかも知れない）のであるが、没年がどうしてもわからない。スワタ君にも調べてもらったが匙を投げた。ところが、フト、クルツの前出の本の索引をみたらベルがあった。占めたと思って本文の二頁を出したら "Sir Charles Bell est mort en 1946" と書いてあるのを発見した。但し生年には一言も触れてなかった。私の訳した、シプトンの "Upon that Mountain"（わが半生の山々）の八五頁に (1870～1946) と書けたのは、このようにして、クルツのお蔭なのである。翻訳の苦労の一部にこういうことがあるということは、読む方の人にはわからない場合が多いと思う。

ということで私ごとが少し長くなったが、クルツの場合は (1887～1967) と書いてあるので、何の苦労もなかった訳である。

彼は右の通り一八八七年（日は不明）にスイスの Neuenburg に生れ、学校生活はずっとそこで送った。家は可なり裕福であったとみえ、Prez-de-Fort の近くの Saleinaz に別荘を持ち、休暇はそこで過していたので、山に親しむ機会には恵まれた環境にあったわけである。

父は Louis Kurz といい、Victor Attinger の甥に当り（二人とも SAC の名誉会員）、Eugène Collomb, Charles Michel 等と共に、熱心なアルプスの開拓者であった。ルイはモン・ブラン山群の地図の最初の制作者であるという。

マルセルは少年時代に次の山々を登っている。

一一才の時、Grand Darrey (3515m)
一二才の時、Crete Sèche(3021m)
一三才の時、父とガイド一人に伴なわれて、Aiguille d'Argentiere (3878m)
一六才の時、単独で、Grand Golliat (3245m)

土地での学業を終えると彼は、連邦工科大学の地形学研究室に身をおき、それ以後、その道一筋に精進していった。

チューリヒにある学士山岳会 (Akademischer Alpenklub) に入会したのは学生時代（二二才）であった。当時は登山家の間に漸く高峰の冬期登攀が注目されはじめていた頃であったが、彼は早くからこれに熱を入れ、一九〇七～一九二〇年の間に彼は既に、Walliser Alpen にある四〇〇〇m級の殆んどで冬期登攀を行なっていた。一九二五年（三八才）にパリの Payot で出版した "冬期登山" (Alpinisme Hivernal) にはこれらの先駆的な業績が殆んど含まれている。

一九一三年、その二六才の時に彼は、ベルンにある "国土地誌局" に入所したが、地形学者としての彼にはうってつけの職務であった。そしてギリシャから地形学関係の使節団が要請された時、彼がこの一員に選ばれたことは言うまでもない。

そこでは考古学よりもオリンピア山塊の方に興味を惹かれ、地形学上の仕事の序でに、最後に残されていた未踏査の "Thron des Zeus" の初登攀をやった。一九二三年にノイエンブルクで発行された "Le Mont Olympe" はこの時の成果を収めたもので、二万分の地図が付録となっている。

彼が登山活動と共に生涯の仕事となった山岳誌の研究に入ったのは、右の調査行が動機となっている。

スイス山岳会（SAC）は彼のワリス・アルプスに関する完璧な知識を買い、そこの案内書の作成を彼に委任した。これの四冊が一九二〇～一九三七年の間に、独仏両語で刊行され、その後も何度も版を重ねられていった。彼はその他にも色々の案内書を書いたが、その精確さは多くの人の信頼を得たのであった。

こうしているうちに彼の関心が次第に、遠く未知の世界の山々に向けられていったことは当然であろう。彼は機会があれば、地形学者として海外への遠征隊に参加したいと考えていた。

（次号へ続く・編者）

古書にも「大菩薩峠」

田畑真一

大菩薩峠方面をあつかった山岳文献のひとつに岩科小一郎氏の『大菩薩連嶺』というのがある。いうまでもなくここにいう大菩薩峠というのは、秩父多摩国立公園にふくまれるそれを指す。

ところで岩科氏のこの書物であるが、これは単に大菩薩峠方面の地誌にとどまることなく、さらにこの峠をめぐって点在する山村社会にも民俗学的、歴史学的な立場からスポットをあてられたものである。しかもそれらのお説のほとんどがめんみつな調査・研究にもとずいており、この意味では労作というべきものである。

ところがこうした本書のなかにも若干の誤謬を指摘することができるのである。

そのまず第一点は、大菩薩峠という地名のあらわしかたに関する問題であるが、古文献には、これが大菩薩嶺と記されているといわれるお説についてである。こころみに関係の条を抄出させていただくと次の通りである。

「大菩薩峠の〝峠〟は古書には〝嶺〟と書かれる。嶺を峠と読むのは漢文から出たものであろう。輯製二十万図にも大菩薩嶺とあり、『甲斐国志』『甲斐叢記』も同じ」

なるほど文化一一年（一八一四）に編まれた『甲斐国志』を検索してみると、大菩薩峠をあつかっている記事には、大菩薩嶺と記されている。たとえば巻之一・巻之四・巻之二三など、みな大菩薩嶺である。

しかし、大菩薩峠をあつかっている記事のすべてにおいて大菩薩嶺と記されているのでは決してないのである。すなわち全一二三巻をくまなく検索してみるときに、巻之五四・巻之七二などには、まさしく大菩薩峠と記されているのである。

したがって、『甲斐国志』などの古文献には大菩薩嶺と書かれるというお説は、画一的に過ぎているわけで結局は誤りをおかしていられるのである。

【注・第二の点、以下は都合により割愛させて頂きました。—編者】

中河与一全集完結祝賀山行

会員（五四〇〇番）中河与一氏の全集がこの度完結したので、その記念とお祝いを兼ね。この種のものとしては珍らしい、山行が行なわれた。

先生は明治三〇年の生れだから、今年（昭和四二年）は丁度七〇才になられる。益々お元気で健筆を振われておられるのは、何よりも嬉しくかつお目出たい限りである。

因みにその祝賀山行には二二名が参加、一〇月八日朝新宿を出て、甲府、韮崎経由、増富温泉からマイクロバスで瑞がき山荘泊り。その夜は祝賀会。翌日は早朝瑞がき山（二三二〇m）に登山、同日往路を戻り、新宿駅帰着解散。

好天に恵まれ、山をこよなく愛される先生を囲んで、和やかな雰囲気のうちに、二日に亘る記念行事を無事終了したということである。（吉沢）

山岳地図（海外）の購入お知らせ

会報二六四号（一～二頁）でお知らせしました通り、ルームの移転に伴い、図書室にマップ・ロッカーを備えましたので、これを機会に取りあえず、入手可能な海外の地図を整備することになり、去る5月29日～6月3日に丸善で開催された「世界の山岳地図と本・即売展」に出品された地図一覧を、二三四点を、吉沢評議員にお願いして、六五六四〇円で購入し、図書室に備えましたのでお知らせいたします。せいぜい御利用下さい。（松田）

購入地図リスト

I: ALPS

The Aletsch Glacier Map. 1 : 10,000. 5 sheets (3 full-size and 2 half-size) (Landestopographie)

Berner Oberland. 1 : 50,000.(Landeskarte der Schweiz, Spezial-Zusammensetzungen, Nr. 5004) (Landestopographie)

Brünigpass. 1 : 100,000. (Landeskarte der Schweiz, Nr. 37)(Landestopographie)

Carte de la région du Mont Blanc. 1 : 10,000. Chamonix Mt. Blanc/Aiguille de Verte/Aiguille du Midi/Le Buet/La Flégère/La Fayet/Servoz/St. Gervais-Les Bains/Les Houches.(Institut Géographique National), Chamonix. 1 : 20,000(Carte de France, 5—6)(Institut Géographique National)

Chamonix. 1 : 50,000. (Carte de France, XXXVI-30)(Institut Géographique National)

Chamonix. 1 : 10,000. (Carte de France, Q-15) (Institut Géographique National)

Cortina d'Ampezzo. 1 : 25,000. (Istituto Geografico Militare)

Cortina d'Ampezzo e le Dolomiti Cadorine. 1 : 50,000. (Carta della zone turistiche d'Italia, No. 1) (Touring Club Italiano)

Gotthardgebiet. 1 : 50,000 (Landeskarte der Schweiz, Spezial Zusammensetzungen, Nr. 5001) (Landestopographie)

Glocknergruppe. 1 : 25,000(Bruckmann)

Gran Paradiso. 1 : 25,000. (Quadro d'Unione della carta d'Italia, 41-I-So) (Istituto Geografico Militare)

Gruppo Adamello-Presanella. 1 : 50,000. Carta della zone turistiche d'Italia, No. 14)(Touring Club Italiano)

Gruppo del Monte Bianco. 1 : 50,000.(Carta della zone turistiche d'Italia, No. 12) (Touring Club Italiano)

Gruppo di Brenta. 1 : 50,000(Carta della zone turistiche d'Italia, No. 15)(Touring Club Italiano)

Gruppo Ortles-Cevedale. 1 : 50,000. (Carta della zone turistiche d'Italia, No. 13) (Touring Club Italiano)

Höllengebirge. 1 : 50,000.(Gebietskarten) (Bundesamtes für Eich-und Vermessungswesen in Wien)

Il Cervino e il Monte Rosa. 1 : 50,000. (Carta della zone turistiche d'Italia, No. 3)(Touring Club Italiano)

Innsbruck. 1 : 25,000. mit Wegmarkierungen. (Gebietskarten) (Bundesamtes für Eich-und Vermessungswesen in Wien)

Innsbruck-Brenner. 1 : 50,000. mit Skirouten. (Gebietskarten) (Bundesamtes für Eich-und Vermessungswesen in Wien)

Kitzsteinhorn. 1 : 25,000. (Osterreishischen Karte, BI, 153/1) (Bundesamtes für Eich-und Vermessungswessen in Wien)

Landeskarte der Schweiz. 1 : 500,000. (Landestopographie)

Lienzer Dolomiten. 1 : 25,000. (Gebietskarten)(Bundesamtes für Eich-und Vermessungswesen in Wien)

Mathon. 1 : 50,000. (Österreichischen Karte, BI. 170) (Bundesamtes für Eich-und Vermessungswesen in Wien)

Mt. Blanc. 1 : 20,000. (Carte de France, 1-2) (Institut Géographique National)

Mt. Blanc. 1 : 50,000. (Carte de France, XXXVI-31)(Institut Géographique National)

Monte Bianco. 1 : 25,000. (Quadro d'Unione della carta d'Italia, 27-II-NE) (Istituto Geografico Militare)

Mote Cervino. 1 : 25,000. (Istituto Geografico Militare)

Monte Rosa. 1 : 25,000. (Quadro d'Unione della carta d'Italia,29-I-NE) (Istituto Geografico Militare)

Monte Rosa. 1 : 100,000. (Ladeskarte der Schweiz, Nr. 47) (Landestopographie)

Oberwallis. 1 : 100,000. (Landeskarte der Schweiz, Nr. 42) (La-

◇日本山岳会図書利用規定◇

（適用範囲）

一、本会の図書の利用は、すべてこの規定の定めるところによる。

（利用の方法）

二、この規定による図書の利用の方法は、室内閲覧、複写及び貸出とする。

（閲覧のできる者）

三、図書を閲覧できるものは、原則として本会の会員に限る。但し会員の紹介があり、図書委員の許可があれば、会員以外でも閲覧することが出来る。

（閲覧時間）

四、図書の閲覧時間は、休館日（日曜、祝祭日ならびに年末年始）及び月曜日を除く日の、午後一時三〇分より午後八時までとする。

（弁償の責任）

五、閲覧又は貸出中に図書を亡失し、又は損傷したものは、図書委員会が別に定める金額を弁償しなければならない。

（閲覧の手続き）

六、図書を閲覧するために図書室に入室する時は、会員証を提示し、備付けの閲覧票に所定の事項を記入した上、図書担当職員の許可を得なければならない。

（閲覧の方法）

七、本会の図書は、図書室内の開架書架に保管する一般閲覧用図書ならびに談話室内の書棚に保管する貴重書の二種に分けて保管する。

(1) 一般図書の閲覧

一般図書を閲覧しようとするものは、図書担当職員の許可を受けた後、自由に閲覧することができる。

(2) 貴重図書の閲覧

貴重図書を閲覧しようとする者は、カード・インデックスにて検索し、所定の閲覧票に記入した上、図書担当職員に申出るものとする。

貴重図書書棚の鍵の取扱いは、図書委員及び、図書担当職員以外の者は、取扱うことができない。

（閲覧後の手続き）

八、閲覧終了後は、貴重図書については、図書担当職員に返納するものとし、開架書架の一般図書については、閲覧図書を所定の位置に返納した後、図書担当職員に閲覧の終了を報告するものとする。

（複写の申込）

九、複写を希望するものは、図書委員又は図書担当職員に申込み、許可を受けなければならない。

（複写の方法）

十、複写は原則として複写を希望するものが、自から写真撮影により図書室内で行なわなければならない。

別の方法により、別の場所で行なう場合は、貸出の項の規定による。

（貸出）

十一、原則として図書の貸出は行なわない。但し会務のために使用する場合で、担当理事が必要と認めた場合には、貸出することができる。

（貸出の期間）

十二、貸出期間は一ヵ月を限度とする。但し図書委員が業務上必要と認めた場合には、貸出期間中にても貸出図書の返納を求める事が出来る。

（規定の改廃）

十三、本規定の改廃は理事会に於て行なうことが出来る。

【付則】

一、本規定は昭和四十二年九月七日より施行する。

二、本規定の中、第九条および第十条の複写の項は、電子複写機の購入に伴ない改訂されるものとする。

以上

ndestopographie)

Piz Bernina. 1 : 25,000. (Landeskarte der Schweiz, NR. 1277) (Landestopographie)

Pizzo Bernina. 1 : 25,000. (Quadro d'Unione della carta d'Italia, 7-II-SE) (Istituto Geografico Militare)

St. Christophe-En Oisans. 1 : 50,000. (Carte de France, XXXIV-36) (Institut Géographique National)

St. Gervais I.B. 1 : 100,000. (Carte de France, Q-16) (Institut Géographique National)

Schneealpe. 1 : 50,000. (Gebietskarten) (Bundesamtes für Eich- und Vermessungswesen in Wien)

Schneeberg und Rax. 1 : 25,000. mit Wegmarkierungen. (Gebietskarten) (Bundesamtes für Eich- und Vermessungswesen in Wien)

Vol Gardena, Marmolada, Catinaccio, Gruppo di Sella. 1 : 50,000. (Carta della zone turistiche d'Italiano, No. 5) (Touring Club Italiano)

Zermatt und Umgebung. 1 : 50,000. (Landeskarta der Schwiz, Spezial-Zusammensetzungen, Nr. 5006) (Landestopographie)

II : HIMALAYA & CENTRAL ASIA

Chomolongma-Mount-Everest. 1 : 25,000. (Bruckmann)

Karakorum. 1 : 750,000. Kammverlaufkarte, entworfen von Marcel Kurz. (Schweizerische Stiftung für alpine Forschngen)

Khumbu Himal (Nepal). 1 : 50,000. Ed. by Research Scheme Nepal Himalaya.

Map of the Everest Region. 1 : 100,000. (Royal Geographic Society)

Map of Soviet Central Asia and Kazakhstan. 1 : 3,750,000. 4 Sheets. (Central Asian Center)

Map of World. 1 : 1,000,000. 25 Sheets. (Covering "Himalaya & Central Asia") (G. S. G. S.)

Nepal. 1 : 506,880. 2 Sheets. (G.S. G. S.)

Nepal. 1 : 1,408,000. (Kümmerly und Frey)

Operational Navigation Charts. 1 : 1,000,000. 4 Sheets. (Covering "Himalaya & Central Asia") (Coast and Geodetic Survey)

III CAUCASUS

Map of World. 1 : 500,000. 5 Sheets. (Covering "Caucasus") (G. S. G. S.)

Map of World. 1 : 1,000,000. 3 Sheets. (Covering "Caucasus") (G. S. G. S.)

Operational Navigation Charts. 1 : 1,000,000. ONC F-4. (Covering "Caucasus") (Coast and Geodetic Survey)

IV AFRICA

Central Ruwenzori. 1 : 25,000. (D. O. S.)

Kilimanjaro. 1 : 100,000. (D.O.S)

Mount Kenya 1 : 25,000. (D.O.S)

V NORTH & SOUTH AMERICA (ANDES)

Anden von Peru, Cordillera Blanca & Huayhuash. 1 : 300,000. (Schweizerische Stiftung für alpine Forschungen)

Grand Teton National Park, Wyo. 1 : 62,500. (United States, Department of the Interior, Geological Survey)

Map of Hispanic America. 1 : 1,000,000. 9 Sheets. (Covering "Andes") (American Geographical Society)

Mount Mckinley. 1 : 50,000 Topogr. Erkundungskarte von B. Washburn. (Schweizerische Stiftung für alpine Forschungen)

Mount Mckinley National Park, Alaska. 1 : 250,000. (United States, Department of the Interior, Geological Survey)

Mount Rainier National Park, Wash. 1 : 62,500. (United States, Department of the Interior, Geological Survey)

Mount Logan, (Wash) 1 : 24,000 (United States Department of Interior Geological Survey)

Mt. St. Elias. 1 : 250,000. (U.S. Department of the Interior, Geological Survey)

Mt. Whitney. 1 : 62,500. (U. S. Department of the Interior, Geologicol Survey)

Operational Navigation Charts & World Aeronautical Charts. 1 : 1,000,000. 9 Sheets. (Covering "Andes") (Coast and Geodetic Survey)

Rockey Mountain National Park, Colo. 1 : 62,500. (United States, Department of the Interior, Géological Survey)

VI MISCELLANEOUS

Kort over Island. 1 : 100,000. (Geodetic Institut)

Südalpen von Neuseeland-Mt. Cook District. 1 : 100,000.

Kammverlaufkarte, entw. von Marcel Kurz. (Schweizerische Stiftung für alpine Forschungen)

(以上)

◇第十回紅葉会◇

十一月十一日～十二日
於　梅ケ島温泉梅薫楼

『十年とは驚きました。その間、何度も紅葉を迎えたり、大間の変貌、井川奥の開発、梅ケ島の潰滅と蘇生、富士見峠みちの開通、有為転変。変らぬものは山好きの集まり』（日高氏）と申込用紙に書かれてあったように、本年で十回目の紅葉会を復興成った梅ケ島温泉で開催。

旅館の収容人員は充分余裕はあるが、懇親会場広場の関係で55名程と予定していた参加申込みが、アレヨアレヨと一〇七名になってしまった。おかげで、車や宿其の他に手違いたらけ。

十一月の梅ケ島はすでに冷たく、午後四時からの野外での懇親会はビールが少しも売れずに、もっぱら日本酒が売れる。百名分の肉・汁粉・おでん・酒を約70名ですっかり平げてしまうころ、地元、梅ケ島村郷土芸能保存会の方々が、珍らしい剣の舞や、男女の遊びを能にしたような郷土芸能を約一時間。アンコールの拍手で終る。

翌日は、生憎くの雨。登山は中止して、下山のバスが来るまで、部屋での思い思いの話が咲く。

もう一晩泊って下十枚山に行くという藤島、村尾、深田、岩永の四氏の見送りを受けつつ静岡へと下る。

『今回も貴会大奮闘の甲斐あって大盛会。その上、雨も伴い、一路、金貴退却のあと、天、俄かに晴上るなど、誠に上首尾。有難く御礼申上げる。次回は（JAC静岡支部実出張もみじ会）と銘打って、今までで世話になった面々に、串焼きの手間をかけさせたらきっと、気分が晴れ晴れすっぱだろう。どうだ？　十二日の山は全く申し分ない。』と藤島敏男氏のくがキの如く、折角の山姿なのにドシャ降りで致し方なく静岡へ下り、有志で東海道五十三次の丸子の宿、すっ名物とろろ汁を喰べに入り、関根吉郎氏を独り置き去りに忘れてしまい、気がついて約一時間、もとに戻れば、裕々ととろろを酒の肴におみきを傾けていた。

何はともあれ、大人満員の紅葉会でした。

尚、昨年27名の死者を出した梅ケ島村へ参加者の申し合せで、金弐万円也を日本山岳会の名儀で見舞金として贈った。

（参加者）　申込名簿順

松本龍次郎、神谷恭、関根吉郎、高橋照、河村栄二、中保、堀川栄司郎、長坂洋一、斎藤かつら、沼倉寛二郎、今井雄二、今井嘉美子、野口末延、藤島敏男、折井健一、牧野衛、村尾金二、岩永信雄、神田、沢田ヱミ、山崎金次郎、日高信六郎、川端信治、水野公男、佐野仁美、多田良栄、鈴木よし子、竹端節次、山本朋三郎、岩本安雄、杉山正洋、山田透、河合俊男、村井博、深沢勲、山野井武雄、園田光一、佐藤佳年、田沼広子、小野利次、清水厳子、清水久子、菅谷保夫、森野恭一、綱倉志朗、石上護治、小泉武夫、市川重明、白鳥雅志、滝浪善一、大村正、望月為、岡本初生、篠原英幸、友野一雄、草野始幸、亀山巍、床原俊、山本寛、鶴見敏彦、早川良太郎、佐野敏郎、深田久弥、斎藤利彦、中川健、丸山竜雄、幸野隆夫、諸岡一次、永原鐵雄、小島甫、萬島秀夫他2名。

（山本朋三郎）

――常さん小伝　一

初見一雄

最近上高地に「常さんの碑」が建てられた。そして十月二十九日、その除幕式なるものがとり行なわれた。

この機会に「常さん」の小伝を記しておきたい。

とに角、この常さんを知る人は大分少なくなってきている。若い人は勿論中年の人でもこの人物に会っている人はますます減ってきている様だし、非幸に親しかった人々の中でも、山から遠ざかってしまった人も多い。

上高地に碑を建てるについても反対がなかったわけではない。歌碑とか、記念碑とかはなるたけ少ない方が風景のためにはよいことだし、目障りで邪魔にこそなれ、何ら益するところなしなのだ。これが存命者ならば文句なく話は出なかったであろう。

しかし亡き人ではあるし、とにもかくにも、名物的な存在になっておったという理由、それに故人の親類縁者が基金を捻り出すとの話だから、誰にもお金の上では迷惑はかからないなどのことから、建立にまでこぎつけたのであろう。

さて当の常さんだが、これを名物だ、ぬしだといったところで、本人が本気でこの気になったことは恐らく一度たりともあるまい。

根っからの猟師だし、山案内人ではなかった。この案内人でなかったということはここにはっきりしておきたいことなのである。大きく出たなといわれれば、そうだと応えるほかないが、こういわなければ伝記を誤ることになろう。

当日、会場の一隅に飾られた追憶出品のなかに、戦前もかなり昔の某新聞社から贈られた表彰状に「山案内人として称える」なる字句があったが、これは事実とちがっている。

本人にとっては紙切れ一枚の値打ちしかないから、本文中の文句に文句をつけることなんかはしなかったに違いないし、第一読めたかどうか。

外に小泉信三塾長からの丁重な礼状も掲げられていた。これは遭難学生への救助にかかわるもので、この文は流麗な草書体で、大体の文意は読みとれるけれど、一字一句を明らかにせよといわれたら逃げだすよりほかはないくらいの美事なもので、恐らく専門家か又はその学校きっての名手の筆になるものかも知れない。本人に読める気づかいは金輪際ないものであることだけは確かだ。

この猟師である常さんが上高地に棲みついて五十年を過ごしたという。この土地に五十年を生活したということが一名物をこしらえ上げたのであろうか。それに加えるに……以下のことは後に述べることにして、出生地飛騨の中尾を出てから、ここ上高地にきたということは一種の出稼ぎであったろう。

親のきめに抵抗したのか、養子先きをしくじったのか、石をもって追われたのかは知るところではない。

飛騨からいえば中尾は一番奥まった部落である。神岡から行っても、高山からきてもそこがどんづまりである。

逆に信州からみれば飛騨へのとばくちであるから、中尾の衆にしてみれば、上高地から島々口へかけては、信州への窓口であり、大げさにいえば文明の匂いをかぐことが出来る手近な場所であったろうと想像される。

年譜からみると十七才で上高地へ来たことになる。明治三十四年頃と思うが、当時の上高地のことは何も知られてはいない。勿論私などは知るよしもないが、早期に温泉の発見があったから、清水屋ぐらいはあったろうし、若干の旅人の宿泊はあったに相違ない。

してみると夏場の漁猟は換価処分の手だてになったろうし、冬の狩でその場のしのぎはついたであろう。

年令の順に従えば嘉門次に師事したことになるが、これとても束脩を納めて、などというものでないことは当りまえ、かもしかの在り場所を教えられるぐらいであったろう。

夏・冬の暮しのたつきはあったらしいことを書いたが、これはあく迄私の想像であって、それ以上のものではない。特に昔の話を本人から聞いたことはないし、そのまわりの人からの話にも出なかったし、また聞こうともしなかったが、これは多少とも残念な気がする。

後年の常さんの生き方からみて、この様なしかとした生活の見透しをたてたうえでの上高地住いだったかどうかは一寸うたがわしい。

まわり万端が少しづつ良くなっていって、暮らしが、他動的に出来る様になったと解すべきかも知れない。明治末から大正にかけ、まして昭和の初期と、登山なる行為がやや一般化されるにつれ、獲れたものは右から左へ捌けることも大いに助けになったであろう。

どういう協定があったか、なかったかは知らないが、大井正吉さんは舟を持っていて、大正池で岩魚を網で獲っていた。これと常さんのとを比べると、大資本と零細業との差があった。

正吉さんは島々の人である。そして島々に住居を持っていて夏場だけ上高地へ来る。その上、ここにも小屋とはいえないくらい数等ましな建物を清水屋から少し離れた中尾峠よりに構えていた。

これにくらべると常さんは違う。最後迄自分の棲家を持たなかった。否持てなかったのである。

この両者をならべてみると、常識型と破滅型との生き方、考え方の差が浮んでくる。

常さんが後者であることは事実だが、かといって彼をさげすむのではない、非難する意味でもない。

がしかしここで破滅型だと決めつけてしまうのは明らかに言いすぎであろう。

弱気で、お人好しで、酒に溺れ、人一倍強い孤独性。こんなことが人を破滅型へ導くそうだ。何もこれが定義ではないし、方程式でもないが、若干あてはまる性格は見出されるのである。

行きずりの登山客が、いいわ、よいわで酒を薦める。対手方の本心・本性を見抜かないで、一諸になって飲む。あげ句に、面白い奴だ、好人物だ、慾がない、とかを吹聴する。そしてこれらが広まる。

噂さが本人を偶像化する。

この循環はある程度あった。そして繰返えされた。

しかし真実、たった一人ポッチの時の「常さん」を知る人は少ないであろう。それとこの土地の人達との交渉ごと、些細なトラブルなど。細々とそれらをも書くべきだろうか。ここで逡巡するのである。伝記は美化さるべきものか、否か、美点だけを取りだしてならべておけばよいものか、どうか。

しかし、どちらにもせよ、真実を記して、後世に待つほどのことはないのである。

長たらしい「前がき」はここまでにする。

（未完）

◇ヤルフーン河の上流◇

H・K山脈とH・R(Hindu Raj)山脈の間にあるYarkhun河は、東部H・Kに入った人達には総て懐しい思い出として残されていることと思うが、この上流へ山登りのために入った隊は今まで一隊もなかった。

ところが今年は、アドルフ老からの通信によると、ドイツ山岳会のミュンヒェン支部に属するAlfred Linshaueer隊（他に、Peter von Gizycki, Wolfgang Griemel, Günter Plötz）が、ヤルフーンを源流まで遡り、チアンタール氷河の源頭にある六〇〇〇m峰三座、五〇〇〇m峰一六座に登ったということである。その高峰三座は、

(8・15) Koh-i-Chiantar (6416m)
(8・28) Koh-i-Chatiboi (6150m)
(8・31) Koh-i-Wargbut (6130m)

である。

チアンタール峰は地図でわかるが、他のはそれにきっちりあてはまる高度の山が源頭にはない。チャティボイは、同じ名前の氷河がダルコット氷河の西隣りにあるがこれとは関係なく、ギルギット区に属するカランバール河へ入るChateboiとある氷河の西にある六二一三mのものと考えられる。

どういう手段でここまで潜り込めたのかは解らないが、兎に角記録としては特筆に値するものというべきであろう。

この分で行くと、Koyo Zom(6872m, H・Rの最高峰)やDas Bar Zom(6528m)の陥落もそう遠い将来ではあるまい。

尚、G・グルーバーは今年、バロギール峠の下にある、ヤルフーン河畔のIshkarwarzまで足を伸ばして戻って来たと言って来た。但し奥さんと通訳が、チトラルの近くで大怪我をしたらしい。

（吉沢一郎）

☆ルーム基金☆ 募金状況報告

10月中の募金は51名一八二・五口で累計一一八七名、申込口数六、三九三口（目標に対し79・8％）に達しました。尚一層の御協力をお願い申上げます。

募金委員会事務局

十月一日～十月三十一日迄のルーム基金応募者名簿

氏名	会員番号	応募口数	現住県
相山之良	四三一	三	兵庫
新谷栄三郎	六一九三	追加、五（計一、五）	青森
赤沼節	四二〇八	一	福島
吾妻山の会	四五八九	一	福島
伊藤孝次郎	四九一五	一	秋田
磯野三郎	一九一七	一〇	石川
海野治良	二四〇九	一〇	東京
大森弘一郎	四五三二	三	神奈川
大山昭	一二七八七	一	新潟
小畑貞吉	三六八五	二	福島
安屋一夫	五二四八	三	神奈川
上条岳人	四一九二	三	長野
川口洋之介	六二八四	二	新潟
北島正八	四三五四	三	大阪
京都大学山岳部	四一四九	一〇	京都
鍬守篤	磨五六〇五	三	神奈川
佐藤	肇五一一四	三	東京
斎藤捨	治二八六一	一	福島
斎藤善	作二七三〇	一	福島
斎藤音	蔵二八六七	一	福島
西郷正	郎四九八六	二	鹿児島
坂本	肇六二一六	一	神奈川
鈴木恭一	郎五五三九	一	茨城
添田啓	一五六九七	一	福島
高橋宏	一七六三	三	埼玉
高橋文	治五六九六	一	福島
田村宏	明六一九九	三	東京
東京薬科大学体育会山岳部	三九二二	三	東京
東京農業大学山岳部	一二〇〇	五	東京
東京都立大学山岳部	六〇一一	五	東京
東京教育大学山岳部	五二七七	三	東京
常盤一雄	二四二三	二	宮城
中原万次郎	九三七	三	東京
中野征紀	一三〇一	追加、五（計一〇）	北海道
中世古隆司	五一七八	五	愛知
成沢正道	四五四九	三	山梨
新津茂雄	三五一六	二	長野
橋本宇一	五一五八	三	東京
初見一雄	一三九六	一〇	東京
平林克敏	五〇七二	一〇	兵庫
藤田博	四五五七	三	兵庫
北海道大学体育会山岳部	三五五八	二〇	北海道
法政大学体育会山岳部	一一五八	一〇	東京
黛卓郎	五五〇二	一	東京
明治学院大学体育会山岳部	五七四四	五	東京
山本良子	四七〇四	一	岡山
和男	六〇八七	二	山梨
横田敬一	二二二五	一	福島
野嶺造	四五五九	三	東京
その他		二	宮城
越後支部		一	

訂正

前号発表の寄付者名簿の中に誤まりがありましたので、左のように訂正いたします。済みませんでした。

◇

日高信六郎　一四二　一〇　東京
小味　秀純

あと20％、宜敷く御願い致します。

図書室便り

本会の図書室も着々と整備をすすめ会員各位からの図書の受入態勢も整いましたので、宜しくお願い申上げます。尚図書の利用規定も九月の理事会で承認になり、九月七日から実施することになりましたのでお知らせ致します。

（大越）

寄贈図書受入報告（42・10）

山と渓谷社寄贈

1、山と渓谷社編『山の花Ⅰ』（カラーガイド1）
2、〃　『日本山々』（〃2）
3、〃　『山の花Ⅱ』（〃5）
4、〃　『尾瀬』（〃6）
5、〃　『上高地』（〃7）
6、〃　『世界の山々』（〃8）
7、〃　『山のうた』（〃9）

新潮社寄贈

1、ガストン・レビュファ著・近藤等訳『天と地の間に』昭42・4
2、新田次郎著『蒼氷・強力伝』（新田次郎山岳小説シリーズⅠ）昭42・6
3、新田次郎著『縦走路・冬山の錠』（新田次郎山岳小説シリーズⅡ）昭42・7

茗渓堂寄贈

・山日記　一九六四年版、昭39・1

雪華社寄贈

・鳥見迅彦編『山の詩集』昭42・9

あかね書房寄贈

深田久弥理事のお力添えで『日本山岳名著全集』全12巻の中、六冊をご寄贈いただきました。内容は次の通りです。尚、残る六冊も近日中にご寄贈下さることになっております。

1、第1巻ウエストン『日本アルプスの登山と探検』・小島烏水著『アルピニストの手記』昭42・3
2、第3巻武田久吉著『尾瀬と鬼怒沼』冠松次郎著『黒部渓谷』昭41・8
3、第5巻大島亮吉著『山』板倉勝宣著『山と雪の日記』伊藤秀五郎著『北の山』昭41・7
4、第7巻尾崎喜八著『山の絵本』河田植著『静かなる山の旅』串田孫一著『若き日の山』昭41・11
5、第8巻石川欣一著『山に入る日』深田久弥著『わが山々』村井米子著『山の明け暮れ』昭42・3
6、第11巻志村烏嶺著『千山万岳』中村清太郎著『山岳渇仰』茨木猪之吉著『山旅の素描』昭41・5
　またあかね書房からはこれらの他次の二冊の寄贈もありました。
7、世界山岳名著全集〈12〉H・ブール著・横川文雄訳『八〇〇〇メートルの上と下』昭41・12
8、ヒマラヤ名著全集〈6〉ハイム・ガンザー著、尾崎賢治訳『神々の御座』昭42・10

〔会報・部報類〕

1、『DMCレポート』No. 215(42.10)
2、『京都山岳』昭42・10月号
3、『山書月報』No. 57(42・10)
4、『山嶺』No. 450（〃）
5、『兵庫山岳』No. 5
6、新潟県山岳協会『会報』No. 2（42.9）
7、〃　『峡彩（通信）』No. 4～5（42.5—10）
8、日本登山学校『雪と岩』1号～8号
9、東京農業大学山岳部『年報』No. Ⅰ～Ⅳ・No. Ⅶ
10、札幌山岳倶楽部『部報』No. 50, 53～79
11、〃　『峰路』No. 5～10
12、日本登山協会『山と雪』No. 110 114（42.6.7.10）
13、自然保護　62～65(42.3～42.6)
14、国立公園　210～212(42.5～42.7)
15、北海道自然保護協会・会報　4（42.5）
16、〃　・会誌　昭41年度
17、南極資料（国立科学博物館編）第28号

〔山岳雑誌〕

1、『アルプ』No. 116 (42.10)
2、『岳人』　No. 242 (42.11)
3、『山と渓谷』No. 347～348（42.10～11）

〔洋書〕

山口節子氏寄贈

1、John Pascoe:『The Mountains-The Bush & The Sea』Whitecombe & Tombs Limited 刊（1958）
2、H. B. Hewitt:『Peter Graham: Mountain Guide』A.H. & A.W. Reed 刊（1965）

V. S. Borushko 氏寄贈

1、I. K. Tupitsin:『Soviet Art Photography』Moscow
2、E. A. Gabushkina『Xapbkob』Kharkov 刊（1967）

Journals Arrived in Oct. 1967

1、『Alpinismus』No. 9 September 1967
2、『Mitteilungen des Deutschen Alpenvereins』No. 5 September 1965
No. 6 November 1965

No. 2 März 1967

3´『Mitteilungen des Österreichischen Alpenvereins』Heft 7/8 Juli/August, 1967

4´『Mazama Vol. XLV No. 13 December. 1963

製本の報告

八月に八丁堀の一ノ瀬製本所に依頼した貴重書、和書等の製本、再製本ができました。十月中旬、二ヵ月振りで装いも新たに書架にお目見えしましたので、左記の通りご報告いたします。

〔製本の部〕

神原達編「ネパール文献目録」
小島烏水著「扇頭小景」
浅田彦一編「日本山水大観」『大陽』大12増刊）
文明協会編「山の呼ぶ声」
四国山岳夜話
広島を繞る山の研究第一輯
厳冬期茂倉谷（新潟高等学校山岳部著）
Conquering Mount Alberta, 1925

〔再製本の部〕

高橋文太郎著「輪標」
大日本地誌大系近江国輿地誌下
高島北海著「写山要訣・完」
志賀重昂著「日本風景論」
ヘディン著・橋田憲蘭訳「絹の道」
松方三郎著「アルプスと人」
野崎左文著「日本名勝地誌」
長井一男訳「ナンガパルバットの悲劇」
平賀文男著「赤石溪谷」
河口慧海著「西蔵旅行記」
スマイス著・石一郎訳「山の魂」
小島烏水著「日本アルプス第一巻」
〃　「〃　第四巻」
柳田国男著「野鳥雑記・野鳥雑記」
The Alpine Journal vol. LXL 1947
Voyages Dans Les Alpes　I
〃　II
〃　III
〃　IV

〔合本の部〕

Selected Index of Reports on Himalaya, Tibet and Central Asia
Vol. 1～Vol. 125

次の和綴の本は各々再製本した上三つの畳紙（タトウ）におさめました。

西石十郎「髣髴日記」全初編
〃　「髣髴日記」全（貳編）
目光山志
〃　〃　〃　〃　二
〃　〃　〃　〃　三
〃　〃　〃　〃　四
〃　〃　〃　〃　五
日本名山図会　天
〃　〃　地
〃　〃　人

〔合本・製本の報告〕

八月七日に中林製本手帳株式会社に依頼しました合本製本が、このほどできあがりました。全部で八十九冊ですが、その内容は次の通りです。（大越）

〔製　本〕

山岳図書展覧会目録
山名と川名語源の研究（畑中左次著）
ナイロンザイル事件（岩稜会編）
ザイルの強さと正しい使い方（梶原信男著）
河口慧海・西蔵文化と我が国の関係（啓明会編）
西蔵図図録

〔合　本〕

石川県天然記念物調査報告（白山・別山）越後の山岳（飯豊・上越・妙高）
藤島玄著　九州山岳　第一輯～二
南極資料 1965（北大低温科学研究所）
山岳　60年～61（三冊）
リニックサック　9号
北大山岳部々報　9～10号
あしなか　63輯～80輯
アルプ　41・1～6　41・7～12
霧の旅　第11年、第12年、第13年、第14年

山、第1号～5号（二冊）
ヨーデルワイス　1963～'65
OMCレポート　1962
山と渓谷　1953 No. 169～174
1954 No. 175～179
No. 180～185
1955 No. 187～194
1956 No. 205～211
1964 No. 299～301
No. 302～304
岳人　1964 No. 305～307
1965 No. 312～314
No. 315～317
1966 No. 331～333
1964 No. 190～192
No. 193～195
No. 196～198
No. 199～201
1965 No. 202～204
No. 205～207
1966 No. 216～218
No. 219～221
No. 222～225
No. 226～229

The National Geographic Magazine
Vol. 71 No. 1～3 No. 4～6
Vol. 72 No. 1～3 No. 4～6
Vol. 73 No. 1～3 No. 4～6
Vol. 74 No. 1～3 No. 4～6
Vol. 75 No. 1～3 No. 4～6
Vol. 76 No. 1～3 No. 5～6
Vol. 77 No. 1～3 No. 4～6
Vol. 78 No. 1～3 No. 4～6
Vol. 79 No. 1～3 No. 4～6
Vol. 80 No. 1～4
La Montana 1951～'55
Revue Dalpinisme 1951～'55
The Canadian Alpine Journal
Vol. 15　Vol. 3
The New Zealand Alpine Journal Vol. 21
The Himalayan Journal
Vol. 25～26
The Alpine Journal Vol. 58
1962 (2)
The Canterbury Mouneaineer
1962～'66
The Yorkshire Rambler's Club Journal 1954
Der Bergsteiger
1966 1～6 1966 7～12
Club Alpin Berge　1957～'65
Alpinismus　1965
Rivista Mensile　1964～65, 1966
Appalachia　1965～66
Appalachia Bulletin
1926, 1962～64
1965～66
Journal Swiss Foundation for Alpine Research Vol. 3
Oxford and Cambridge Mountaineering　1921, 1928～29
Anuario de Montana　1957～60

お願い

なお「岳人」「山と渓谷」のバックナンバーの欠号が大分ありまして合本が滞っておりますので、もし上記の欠けている号を記しますので、もし皆様のお手持ちの中でお譲りいただけるものがありましたら、ご寄贈下さい。

岳人　No. 1～3, 38～62 111～122 124～128 153～164
山と渓谷　No. 7～12, 33～43, 46～76, 81～84, 254. 278. 308, 310, 323, 324, 326～328 336　（以上）

NILAKANTHA-Story of the Indian Expedition of 1961, by MajorN. Kumar.

インドの情報出版局から出た本がやっと出来た。版は一九六五年である。ニラカンタ（ガルワール、6596m）の登頂は、A J. 1963-1 及び 1964-1 で多分に怪しいものとして批判をうけているものである。（吉沢）

九月定例理事・評議員会

（七日・ルーム）

▽出席者　松方会長、渡辺副会長、理事―深田、大塚、丹部、飯野、野田、竹田、酒井、長尾、大貫、関口　評議員―望月、藤井、吉沢、石原、折井、中屋、津田　川森、沼倉、監事―牧野、松本

（委任）三田副会長　理事―加藤、辰沼、松田、宮下、平山、広谷、中島、評議員―佐藤、島田、堀田、後藤。

▽議事・報告事項

(1)募金の現況報告及び今後の対策について……（飯野）

九月七日現在五百七拾弐万円で目標額に対して約七二%の達成にすぎない。このまま推移すると会財政自体危機に陥入る。従って会員及び会員外に呼びかけて目標額の必成を期したい。

(2)日本山岳協会指導員推薦についての処理について……（大塚）

特別認定の推薦を希望する者の取扱については八月の理事・評議員会での結論にもとずき保留させてもらうこととして、申出会員に対して、事情説明の文書を発送する。この点について全員了承。

(3)職員採用について……深田、飯野

川瀬書記の後任として永原耀雄氏を若村事務員の後任として佐々木光子氏を採用するという常務理事案を承認

(3)図書利用規定について……飯野

原宿ルーム時代の利用規定を新ルーム時代の利用規定

ムに即応して一部変更した常務理事会案を承認。(規定については別添)

(5)会議室使用規定について……飯野

会員外に対する貸室の利用料、申込方法について定めた常務理事会案を承認。

この点について、会員外利用の場合で会員が半数以上の場合、学生団体(団体加入)の場合等何らかの特典を考慮すべきとの意見が出され、討議の結果、半数以上会員の場合は二割引、団体加入の学校山学部の場合は五割引とする旨決める。

(6)鍵取扱について……飯野

鍵取扱に関する常務理事会案を説明本取扱は内規に属するので特に公表はしないこととした。

(7)年次晩餐会について……関口

日時は十二月一日(金)会費は一五〇〇円、会場は新宿プリムラ(伊勢丹会館内)と決定

(8)報告事項について

①都岳連関係……野田

会長副会長選任について説明

②会報関係……吉沢、酒井

会報の第三種扱については具体的に進捗していない。会員増加に伴い会報の発行部数を現在(二六〇〇)より百部増刷する。

③山日記について(大貫)

現在十一月一日発行の予定で書店に十一月半ば頃には出る予定。

④海外登山について……大塚

来年度のスポーツ外貨申請は現在の所一件のみである。

⑤支部関係について……深田

北海道で会員有志懇談会が開かれ、現在支部設立の気運が盛上っている

⑥富士山診療所について……長尾

会夏の利用者は五四名であった。例年のことながら医師の確保に悩まされた。

(7)印度との合同登山に就て…丹部

⑧UIAAの加盟について…関口

協会より依頼のあったもので、現在手続中である。

⑨文部省登山研修所の状況について

講師として参加した大塚酒井両理事から情況報告があった。

⑩クラブタイの発売……川森

会長発案によりかねてから準備企画中のクラブタイが完成したので、ルーム基金募金の意味も含めて発売する。価格は千五百円。

以上

十月理事・評議員会

▽日時　昭和42年10月5日午後七時～

▽場所　本会会議室

▽出席者　渡辺副会長、理事―深田、大塚、辰沼、松田、丹部、長尾、野田、酒井、関口、中島、評議員―吉沢、折井、中田、高山、須賀、沼倉、川森、監事―牧野、松本、他に初見、村井出席

(以下委任)理事―飯野、宮下、大貫、広谷、評議員―伊藤、佐藤、中屋、津田。

▽議　事

(1)ルーム基金募金の件……深田

九月末を以て申込は六、二一一口、目標額に対し七七・六%に達したが、納入金額は五七〇万円で五〇万円程未入金の者がいる。募金者の芳名、金額は報告をかねて会報「山」二六九号に掲載することを決める。尚募金の期間は九月末迄であったが、目標達成迄延期することにする。

(2)都岳連関係報告……野田

九月八日開催の都岳連常任評議員会で、会長候補であった松方氏が辞退した結果、小島六郎氏が万場一致で推挙された。副会長問題は小島氏に一任し十月十七日の常任評議員会で決まる予定である。尚本会より評議員として出ていた野田氏が、監事に選任されたので、その補充をする必要がある。本件については十一月の理事会で決めることにし、人選の検討を常務理事会に一任する。

(3)指導員特別認定の件

本件申請者への連絡が大変におくれたが、八月の理事、評議員会での決定に従い、直接に本人宛通知することをきめる。

(4)其の他

①「山」の三種郵便物認可申請の件

担当の酒井理事により、規定方針通り、早急に手続きをすすめることを確認する。

②国際山岳協会連合(U・I・A・A)加盟の件

本件に対しては既に入会申込の手続を完了しており、十月七日のマドリードでの総会で承認になる見通しである。尚年会費は四〇ドルである。

加盟後の事務連絡の国内への連絡、伝達は、「山」に掲載すると同時に日本山岳協会を通じて全国に流すことにしたい。

③台湾省山岳協会第三次訪日登山隊招請の件……関口

本件については去る八月九日開催の常務理事会にはかって招請の事務手続をすすめてきたが、その手続きを完了した。十一月に来日の見通しである。

④ルーム移転記念パーティー決算報告の件……関口

一一四名出席という盛会のため一七、五八〇円の剰余金が生じた。本剰余金は全額ルーム基金に繰入れることに決定する。

⑤山岳62年号編集状況につき報告……中島

二頁に予告の通り23編の原稿の殆んどが集まったので近く印刷に廻す予定である。尚広告等については竹田理事に依頼して、依頼状を作成中であるが、昨年同様各位の協力をお願いしたい旨の説明があった。

⑥本会ルームの移転登記は八月十八日付を以て認可がおりた。

⑦冬期の暖房の件

向井ビル管理人より夜間のスチーム暖房を如何するかの問合せがあった。経費は一時間当り四二円、人件費約一五〇円の由。

本件、午後八時まで暖房を入れることを確認する。

⑧会員外の講師に対する謝礼の件

小集会等において会員以外の外部講師をお願いする場合には、今後はしかるべき金額の謝礼をだすことを諒承する。金額については常務理事会一任とする。

⑨神河内山荘敷地契約改更の件

松本営林署に対し本年十月一日以降の契約改更の手続きを行なった。

⑩常さんの碑除幕について……村井、初見

⑪チェコ大使館のフィルム・ライブラリーの件

吉沢評議員よりヒンズークシュのルンコー附近のフィルムがあるので折をみて小集会で上映しては如何かとの提案あり、本件、集会担当の関口理事に一任す。

以上

常務理事会

▽日時　十月二十九日(日)六時三〇分～

▽場所　本会ルーム

▽出席者、辰沼、丹部、大塚、松田、宮下各常務理事。

(委任)正、副会長、加藤、深田、飯野各常務理事

▽議　事

(1)年次晩餐会準備の件

(2)会員名簿編集の件

(3)本会備品蔵書等に対する保険の件

(4)募金対策検討の件

(5)永坂鉄夫氏退会届取下げの件…承認

(6)山荘増築計画の件

(7)経理対策検討の件

(8)その他理事・評議員会議題検討の件

以上

十一月定例理事・評議員会

▽日時　昭和四十二年十一月二日　6・45～

▽場所　本会会議室

▽出席者　松方会長、三田、渡辺両副会長、理事―深田、加藤、辰沼、大塚、松田、飯野、広谷、関口、大貫、評議員―折井、吉沢、石原、藤井、沼倉、監事―牧野

(以下委任)理事―野田、丹部、長尾、酒井、宮下、評議員―高山、島田、川森、津田、望月、監事―松本。

▽議　事

(1)年次晩餐会開催の件

日時・会場は前回決定通りとし、開催通知は近日中に発送の予定である。

恒例のこの一本展は、図書委員会で検討の結果明治百年に因み、『明治百年山岳図書展』とし目下準備をすすめている。

当日バザーを行なうか否かについては、実施可能であれば行なう方針とし、婦人懇談会に一任することにする。

(2)名誉会員推薦の件

名誉会員推薦規定に基き出席評議員により検討の結果、万場一致、牧野平五郎、松本善治、岡埜德之助の三先輩を推挙することを決定。

(3)永年会員推薦の件

今年度の該当者として、伊藤英三郎、松方三郎、又木周夫の三氏を決定。

(4)ルーム基金募金報告並びに今後の対策検討の件

十月末日現在の応募額は六、三九三口(七九・九%)で十月一ヵ月間で一八二口の応募しかなく頭打ちの形である。

対策としては、既に申込んでいて未入金の者に入金督促の通知を出すこと。法人関係の大口、（新聞社、民放連、等）に具体的活動を開始することにし、依頼状の作成等早急に担当飯野理事のもとですすめることにする。

(5)職員正式採用の件

新規に採用した三名については試用期間をすぎたので正式に採用することを決定。

(6)冬期間のルームの開室時間・変更の件

冬期（十一月一日～三月三十一日）間は従来九時であった開室時間を一時間繰上げ八時迄とすることに決定

(7)「山岳」「山日記」「山」の編集状況報告並びに対策検討の件

①山岳62年は既に入稿しているが、広告が集らないと、出版できない。近日中に担当の竹田理事より依頼状が届くことになっているので御協力をお願いしたい。

②山日記　十一月九日に刷了の予定。

③「山」を毎月10日の発行日を厳守すると同時に三種認可をとるべく会報編集委員会を開いて早急に対策を立てる様要望あり。

(8)秩父宮スポーツ博物館の増設に伴う展示品出品の件

日本山岳協会より十月十九日付42山岳協会発第33号を以て、国立競技場内の秩父宮スポーツ博物館内に設置される「目でみるスポーツ展」の登山のコーナーに、マナスル他ヒマラヤ登山に関する装備、写真等を寄贈願い度い旨依頼あり、本件諒承す。

尚寄贈品の内容については常務理事会一任とする。

(9)会員名簿発行の件

今年度の課題の一つであるので、是非年度内に発行したい。就いては担当の丹部理事より、勤務先の入った名簿は調査に時間がかかり無理なので、一九六〇年版のスタイルに戻したいとの要望あり。本件反対意見もみられたが種々検討の結果、諒承し、早期刊行を期することにする。

(10)新旧役員交歓会の件

ルームの移転等で開催がのびのびになっていたが、川崎理事の慫慂をかねて、十一月中旬に開催することに決定。

(11)都岳連評議員推薦の件

野田三郎氏の都岳連監事選任に伴う、本会からの評議員は、村木潤次郎氏を推薦することを決定。

(12)神河内山荘の件

五〇〇坪の敷地拡張申請に関連し、増築計画の具体的原案を山荘管理委員会で検討することにし、併せて石原評議員から提案の山荘管理の問題についても検討方依頼する。

(13)各担当理事報告

①指導……広谷

雪崩のシンポジウムは一二〇名の出席をえて成功裡に終了した。記録は「山」又は「山岳」用として編集したい。

冬山登山技術講習会は十一月二十三日～二十六日富士山五合目御庭小屋をベースとして実施の予定であるが、今回は全国から応募あり、三〇名の定員のところ三五名まで受付けて締切った。

女子12名、男子22名（この中会員外は17名）講師はC・L山崎以下12名、マネジャー、小味、ドクター長尾を加え総勢五〇名、大型バス一台で出発の予定である。

②婦人懇談会……広谷

日印合同登山隊の日本側隊員は次の五名に決定した。

武田満子（35）、宮崎英子（34）、三島蓉子（32）、須田紀子（26）、折井正子（25）

③集会……関口

十一月の四水はインドのブンシャー氏によるエベレスト登山報告を予定

④海外連絡……関口

U・I・A・A加盟承認の連絡が十月十七日付とどいた。

A・A・Cの会長、ニコラス・クリンチ氏に決定。（吉沢）

十一月十日、ノルウェーのアルネ・ネス氏来日の予定（吉沢）

⑤医療……長尾

同立公園協会より本年度夏山診療所に対する助成金が三〇万円交付された。各大学二二、〇〇〇円、本会富士山頂診療所一四、〇〇〇円の率で配分の予定である、各大学からの書類が揃うまで、助成金は同協会で保留されている。

以上

会報二六一号六頁の「退会届」で退会と報ぜられましたが、これは事務手続上のミスのため、本人の退会の意志ないままに掲載されてしまったことが確認されましたので、本件は十月二十七日開催の常務理事会において、「復活」ではなくて退会届取下げということで処理することに致しましたので御諒承下さい。

宮城支部住所変更

支部長交替に伴い、支部の事務所は、伊達支部長宅に変更になりました。

仙台市肴町86、伊達方

電話　仙台　21―六八五四

ルーム日誌（42・8）

（前号に掲載洩れ）

2日（水）常務理事会
3日（木）定例理事評議員会
8日（火）図書委員会
9日（水）二水懇親会
11日（金）集会委員会
12日（土）常務理事会
16日（水）二三三回小集会
講師松方三郎（富士と私）
18日（金）海外連絡委員会
婦人懇談会
21日（月）集会定例委員会
22日（火）図書常任委員会
23日（水）二三四回小集会
司会西丸震哉（山の怪談）
24日（木）炉辺会
29日（火）常務理事会

（42・10）

2日（月）婦人懇談会
4日（水）暁峯学友会
5日（木）定例理事評議員会
7日（土）学生部委員会（映画会の件）
12日（木）婦人懇談会（日印婦人合同登山）
17日（火）図書委員会
18日（水）婦人懇談会（ボリビヤ登山報告）

19日（木）学生部委員会
20日（金）海外連絡委員会
24日（火）ソ連V・S・ボルシユコ氏歓迎会
25日（水）小集会第二三七回雪崩に関するシンポジニーム（会場原宿日体協）
27日（金）常務理事会　以上

編集後記

何だかこの頃は目茶苦茶に忙しい。朝から晩まで、山のことで頭は一杯。歩いていても「山」の次号の割付を考えている。書き魔とか、通信魔とか言われながら、もう「山」も三一回編集して来た。あと五回やれば満三年ということになるが、進歩のあとが見えないのが残念である。とに角頑張りますからよろしく。（吉沢一郎）

昭和四十二年度
「山」編集委員の顔振れ
編集代表　吉沢一郎
松田雄一
宮下秀樹
小方全弘
竹内通雄
坂本矩祥
酒井敏明
担当理事

昭和四十二年十二月十日発行
東京都千代田区神田錦町三―二三　向井ビル
発行所　社団法人　日本山岳会
編集代表　吉沢一郎
振替口座東京四八二九番
（293）七四四一
頒価五十円
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社　技報堂

あなたのネガから　パネル張り
山岳写真を
ありし日の、苦斗と歓喜をいまここに

35mmからすばらしい迫力！

あなたのネガから、明快なコントラストと適切なトリミングで、大型・美麗・パネル張り写真を製作いたします。
ネガと返送料150円同封でご註文下されば到着後1週間前後で製作発送いたします。
代金は着品後10日以内にご送金下されば結構です。
なお代金前払いの方には送料は弊社で負担いたします。
但し、ネガ不調のため作品にご満足頂けないと思われる場合には、ネガ、代金、返送料ともそのまま直ちにご返送申上げます。

お気軽にネガを送って下さい

白黒の部
■全紙半分……パネル張り　¥ 1,200
■全紙（新聞1ページ大）……パネル張り　¥ 1,600
■全紙2倍……パネル張り　¥ 4,000
カラーの部（ネガ、カラーに限ります）
■四切……パネル張り　¥ 1,500
■半切……パネル張り　¥ 3,000
■全紙……パネル張り　¥ 5,000
上記以外のサイズ、または同時に多数のご註文の際はご照会下されば、別にお見積申し上げます。

優れた技術とハイセンスの
カタログ進呈
本多写真
本多善博
名古屋市熱田局区内柴田西町1―16　TEL（611）7047

山の店、山の店、山の店、山の店、山の店、山の店
登山用具専門店
プライスリスト進呈
山の店
大阪市北区曽根崎上1-24　TEL341―4192
山の店、山の店、山の店、山の店、山の店、山の店